

光受寺通信

NO.196

R7.5.1 発行
発行元 光受寺



緑の美しい季節がやってきました。私にとっては一年で一番過ごしやすい時期でもあります。この時期になるとなんとなく気がそぞろとなり、心がへ出かけた人もなってきました。

心がへ出かけたころ、特別な場所でもなくともよいのです。緑に身を包まれてゆつゆと時の流れに身を任せられるような場所であれば、心もほぐれていきます。

時々、突然に思い立っては車で出かけ、ほとんど人にも車には出会わない山道を走り続けることがあります。途中見晴らしの良い場所でもあれば下界を見下ろしながら、思い切り深呼吸をします。ただこれだけのことなのですが、私にとってはとても幸せな時間だと思えるのです。自然の中に身を置くことで心が洗われるように感じますが、確かにそんな気持ちにもなるものです。

「心が洗われる」を辞書で引いてみますと、「心の汚れや、煩惱が清められ、すがすがしい気持ちになること」とあります。私には心の汚れや煩惱が清められるかどうかはわかりませんが、日々の言葉や行動の言葉や行動を噛みしめてみれば私たちの日常は心の汚れ、煩惱まみれで生きていることが大前提になっています。

『歎異抄』には「念仏の心、みなもつゝ、心は清く、心は濁り、濁りを生きたる私たちの姿が言いたいことでもあります。」とあることなきに、ただ念仏のみぞまじることのみにておわします。」と濁世を生きたる私たちの姿が言いたいことでもあります。

私たちは大自然の、あるがままの偽りのない世界に包まれることにより、自然の日常が浮き彫りになり、心も静かになり、心も静かになります。私を感じた幸せは、自然のあるがままの美しい心と、安心の心と、優しさ、そんな世界へのあしがねの心を感じただけです。

4月の学習会の報告

—歎異抄 第12条 3回目—

今回は第12条の第3回目の「まとめ」の時間となりました。

この抄は、往生(救われる)するために、「お念仏」を信じていることが大切なのか、それとも学問(経典や注釈書)を学ぶことを旨とすることが大切なのかを論争する内容となっています。

学問を旨とする聖道門の人たちは「念仏は劣(おとつた)人の為の法であり、その教えは浅く卑しく、決してそれで助かることはない」と非難していました。

それに対して浄土門の人たちは「私たちのような何も知らない者でも、本願を信ずればお助けにあずかると説かれているみ教えを信じておりますから、あなたがたのような仏道修行の能力の優れた人から見れば、劣っていると思えても、私たちに与っては最上のみ教えであります」と反論しました。

さらに「学問を重んずるならば、学問することによって、阿弥陀如来の本願は、善・悪・浄・穢(ぜんまくへいようそ)を全く問題にしないのだ」ということを学びたいが本当の意義ではないのか」とも反論したのです。

すでに歎異抄の第1条では「弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とす」といっています。そのゆえは、罪悪深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらざる、念仏にまざるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからざる、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆえに」といっています。聖人の仰せは明確であり、疑う余地のないことを改めて確認した抄文になっています。



空と雲と、川と緑と

お寺サロン



— 廣専寺にて —

4月24日(木)恒例のお寺サロンが開かれました。お天気も良く過ごしやすい気候となったこの日、光受寺、廣専寺門徒さんたち19名が参加してくださいました。



光受寺若院からは、約10分前後の仏教小話があり、若い頃に読んだことのある五木寛之の『大河の一滴』を取り上げ、自分の人生を振り返りながら、これからの人生をどう生きたらよいのかを話していかれました。

また、廣専寺の若院からは前回に引き続き『正信偈』の解説、「一切善悪凡夫人ノ難中之難無過斯」までを行っていただきました。弥陀の本願(一切衆生を救う)を信じることの難しさを力説されていました。

今月の掲示板

われもひとも、

よしあしといふことを

もつしあえり。

歎異抄 後序より

いのちつなげられるか、かすかな希望に思いを込めて。

飛龍梅

心配されていた枝に新芽がふき出しました。それは花の終わった3月下旬のことでした。

もう新芽が出ないのではと、恐る恐る剪定を済ませた後のことでしたので、新芽がふき出した時の喜びは言いようがありませんでした。その後も次々とほかの枝にもふき出し始め、枯死は免れたように思っています。

現在では左の写真のように、新芽がどんどん伸び始めています。主幹に近い枝にも新芽がふき出し、数年後には樹形が整えられる枝にもなりそうですと、期待を膨らませています。

4月20日現在



今、行っている作業は、夏場の暑さに耐えられるようにと傷んでいる木の幹や枝に麻布を巻いています。また、完全に枯れている木の上部を少しずつ切り落とす作業も進めています。



私たちは「よしあし」の発想でのみ物事を判断してはいないだろうか。「これは善」と決めつけた瞬間に「これは悪」という決めつけを生み出したことになる。その事実を認められた時、己の深い心の闇と、愚かさなどが自覚されてくる。親鸞聖人自身も、この事実を深く自覚され、その苦しみを超えていく教えに出遭っていかれたのだ。

春は自然界では多くの「いのち」が誕生する時期です。

お寺ではツバメが巣作りに励み、メダカは大きく膨らんだお腹に、いっぱいの卵を抱えています。

すでにホテイアオイに小さな卵を産み付けてもいます。2週間もすればあたらしい「いのち」が誕生することでしょう。

いのちの誕生ここにも



産み付けられた卵は増やすために、別の容器に入れます。

現在は昔、本堂で使っていた大きな火鉢に飼っていますが、水を替えないでも元気に育っています。

お知らせ

お寺サロン 5月15日(木)

一時半より 二時半まで

『親鸞聖人の「ご生涯」』パート2

『正信偈』解説

光受寺学習会 5月17日(土)

『歎異抄』第3章

2時より3時半まで

「アオ才視聴あり。」